

平野塚穴山古墳の謎(上)

——被葬者は茅渟王か？——

塚口義信

今から二十六年ほど前の昭和四十七（一九七二）年三月、日本人たちがその美しさに驚き、そして歓喜の声をあげた、ある出来事がありました。それは、高松塚古墳（奈良県高市郡明日香村）の発掘による極彩色壁画の発見です。人びとは、この“世紀の大発見”に、われさきにと飛鳥に駆けつけ、日本中が興奮の渦に巻き込まれました。

しかし、わが香芝市に、この高松塚古墳と比較しても決して遜色のない、すばらしい古墳のあることを知る人は、意外に少ないようです。それは、平野字塚ノ段に所在する、平野塚穴山古墳です。

この古墳には壁画は描かれておりませんでしたが、その被葬者は高松塚古墳よりも、さらにランクの高い人であったことが推測されます。たとえば、棺ひとつを例にとってみても、高松塚古墳のそれが漆塗木棺（木に漆を塗って作った棺で、木芯乾漆棺ともいいます）であるのに対し、平野塚穴山古墳のそれは、当時において最高級の棺といわれる夾紵棺（布を漆ではり固めて作った棺）です。

では、いったい、その夾紵棺の主はだれだったのでしょうか。今回と次回の二回にわたって、平野塚穴山古墳の被葬者の謎に迫ってみたいと思います。

はじめに

平野塚穴山古墳は、六基ほどの古墳から成ると推測される平野古墳群のうちの一基です。江戸時代に顕宗天皇陵に比定されていたこともあつて、学界では早くから注目されてきた古墳ですが、正式な発掘調査が実施されていない状況では、その研究にもおのずから限界がありました。

ところが、昭和四十七（一九七二）年五月、石槨の内部が乱掘されるといふ事態が生じたために、奈良県立橿原考古学研究所の手によって緊急の発掘調査が行われ、ほぼその全容が明らかとなるに至りました。

した。ただ、残念なことは、早くから石槨部が開削していたため、遺物の保存状態がきわめて悪かったことです。しかし、それにもかかわらず、発掘担当者の献身的な努力によって、これまで知り得なかったさまざまな事実が明らかになったことは、学界に対する大きな貢献であり、一学徒として、まことによるこびに堪えません。いま、その調査報告書に基づいて古墳の概要を示すと、およそ以下のようです。

この古墳は一辺一八メートル、高さ四メートルほどの方墳であつたと推定され、その築造年代は七世紀後半ないし末葉であつたと考えられています。全長四・四メートルの横口式石槨は玄室、玄門、羨道の各部より構成され、床面には二一枚の凝灰岩切片が敷き詰められていました。遺物としては、二〇〇点余りにのぼる夾紵片・藍胎片（組紐を芯にして、そこに漆を幾重にも塗ったものの破片）、金環一、中空玉一、銅製品片（銅碗らしい）一一、歯牙四、小骨片若干、などが検出されました。

また、かつて墳丘の北西部が掘削されたとき、須恵器の杯身が出土しています。尺度は唐尺（二尺二寸三〇センチメートル弱）が使用されていたと考えられ、また石槨の構造には朝鮮半島百濟扶餘の陵山里古墳群の影響がみとめられます。なお、この古墳は昭和四十九（一九七四）年、国の史跡に指定されています。



平野一号墳（平野車塚古墳）

被葬者についての諸説とその問題点

さて、この古墳の被葬者はいつたい、だれでしょうか。いままで出されている主な説を挙げてみると、およそ次のようになります。

- (一) 顕宗天皇
 - (二) 百済系の渡来人
 - (三) 當摩公豊演（『日本書紀』天武天皇十年二月庚子朔己巳の条）
 - (四) 高市皇子（天武天皇の皇子）
 - (五) 茅渟王（皇極・孝徳両天皇の父）の一族のだれか
- はたして、どの説が妥当でしょうか。

(一)は文化四（一八〇七）年の『山陵絵図』に見える説ですが、古墳の築造年代の点において、かなり無理があります。すなわち、顕宗天皇は五世紀末葉の天皇ですが、この古墳の築造年代は七世紀後半です。両者の間には一七〇年前後の隔たりがあり、この比定は絶望的といつてよいでしょう。

(二)の説は、百済の墓制の影響がみとめられることを、その主たる論拠としています。たしかに、この点は被葬者を考えるにあつて見逃しえない点ではありますが（後述参照）、簡単にそのように結論づけることができるかどうか、疑問なきをえません。というのは、百済の墓制の影響は平野塚穴山古墳についてのみいえることであつて、平野古墳群を構成しているほか



- 1.平野1号墳（平野車塚古墳） 2.同2号墳
3.同4号墳 4.同3号墳 5.同5号墳（平野岩屋古墳）
6.平野窯跡群 7.平野塚穴山古墳 A～F.七ツ石

平野塚穴山古墳周辺の遺跡分布図

（橿原考古学研究所編『竜田御坊山古墳』1977より。一部改変）

平野塚穴山古墳の謎―被葬者は茅渟王か？

の古墳については、ほとんどみとめられないからです(ただし、消滅したものや平野三号墳については不確定要素が多いので、ここでは保留)。さらに一瀬和夫氏の研究によると、この古墳の架構法はそれ以前の横穴式石室と共通する点が多いとのこと。また、平野付近に百済系の人たちが葬られたと記している文献史料も、全くみつかっておりません。

したがって、平野塚穴山古墳にみとめられる百済の影響は、あくまでも石槨造宮の技術面に限定されるべきであって、被葬者論にまで及ぼすのは行き過ぎではないかと思われまふ。

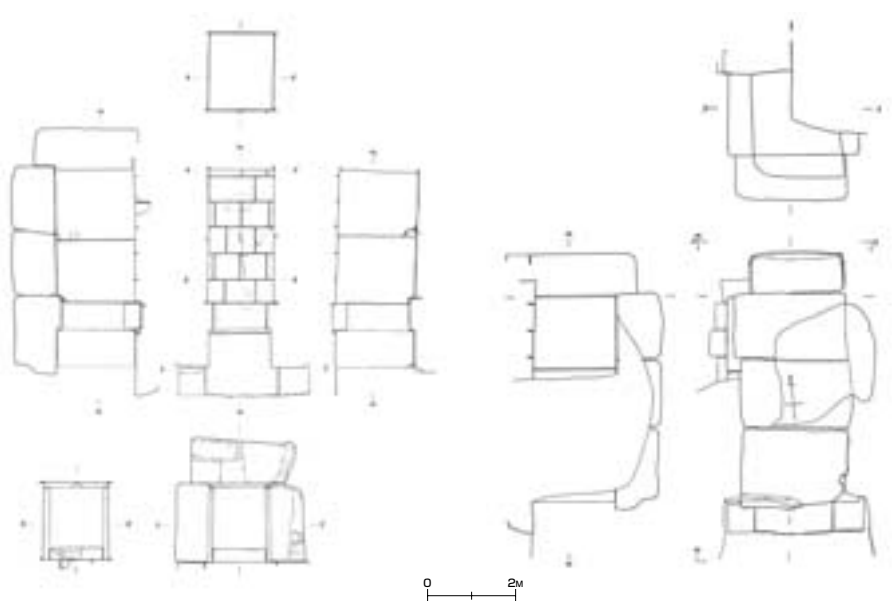
(三)の説については、年代的には整合しますが、地理的な面において、やや難があります。すなわち、當摩公氏が本拠とする當麻町と平野の地とはかなりの隔たりがあり、この付近まで當摩公氏の勢力が及んでいたとは、とつてい考えがたいのです。

同様に(四)の説も、所在地の点において難があります。高市皇子の奥津城については、『延喜式』(三代式の一つで、九二七年成立)諸陵寮に「三立岡墓 高市皇子大和国広瀬郡に在り。兆域東西六町。南北四町。守戸無し。」と記されています。しかるに、平野塚穴山古墳の所在する平野の地は葛下郡に属し、いまだかつて広瀬郡に属したことはありません。したがってこの説は、まず成り立たないといつてよいでしょう。

そこで注目されるのが、(五)の説です。

この説は小泉俊夫氏によつて唱えられている説ですが、いままです提唱されてきた説のなかでは最も論拠がしっかりしていて、かつ、説得力に富んでいます。私も基本的には、この説に左袒したいと思っています。

ただ、考証の方法において氏の論説と私見とはかなりの隔たりがあり、またその被葬者についても若干、意見を異にしています。そこで以下、氏のすぐれた研究に導かれながら、私見を述べてみることにしましょう。



平野塚穴山古墳 石槨実測図(1)

平野塚穴山古墳 石槨実測図(2)

(榎原考古学研究所編『竜田御坊山古墳』1977より。一部改変)



文化4(1807)年山陵絵図 平野3号墳



文化4(1807)年山陵絵図 平野塚穴山古墳

葛城氏滅亡後の 葛城北部

七世紀代における葛城北部にはいったい、どのような政治集団が盤据していたのでしょうか。五世紀代には大王家の外戚として繁栄していた葛城氏が盤据していましたが、その王統がとだえる六世紀以降の時代になると、一時的には政界で活躍するようなことはあっても、大局的には、その勢力は衰退の一途をたどっていたと考えられます。

これにかわって勢力を扶植したのは、桜井市忍阪の地に拠点をもつ、敏達天皇押坂彦人大兄皇子・舒明天皇・茅渟王系の一族（これを「忍坂王家」と仮称します）でした。

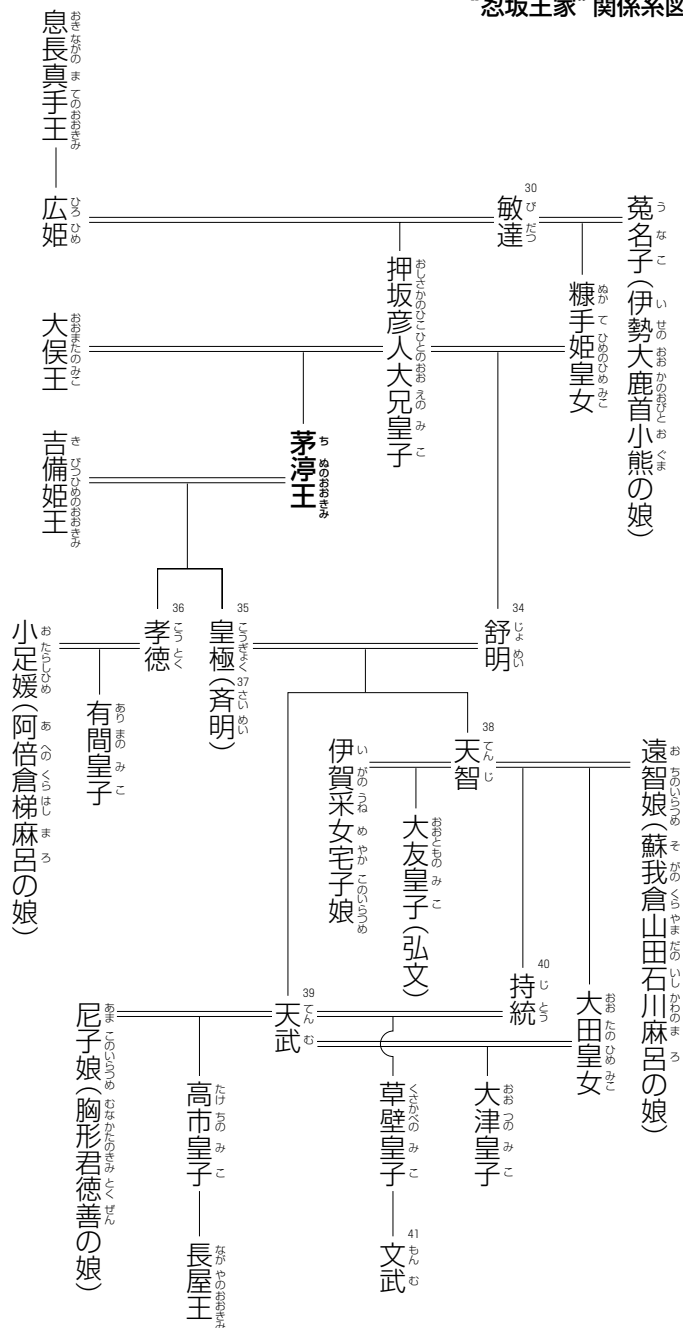
広瀬郡と忍坂王家

敏達天皇はその元（五七二年）四月、大和国広瀬郡百濟（北葛城郡広陵町百濟付近）の地に「百濟大井宮」を造営しましたが、この地はその後、子息の押坂彦人大兄皇子を経て、孫の舒明天皇へと伝えられていったと考えられます。

現在、広陵町百濟には、十一面観音を本尊とする百濟寺があり、その境内には、鎌倉時代中期に建立された見事な三重の塔（国指定重要文化財）が聳えています。彦人大兄皇子は敏達天皇が崩御したあと、この付近に「水派宮」を営みましたが、子息の茅渟王が「百濟王」（『新撰姓氏録』）と呼ばれていたのもそのためで、この名は百濟に所在した水派宮で、父とともに暮らしていたことに由来するものとみて、ほぼ間違いありません。

また、彦人大兄皇子の子息の舒明天皇

“忍坂王家” 関係系図



(数字は『日本書紀』および『続日本紀』による天皇歴代数)

平野塚穴山古墳の謎―被葬者は茅渟王か？

も同じように、この百済近辺の地に「百済大宮」と「百済大寺」を造営していたと考えられます。ただし、百済大寺は舒明天皇在世中には完成しなかったらしく、次の皇極天皇の時代に、ふたたび大寺建立の詔が発せられています。なお、この百済大寺はのちの大官大寺、つまり奈良時代に南都七大寺の一つに数えられた大安寺のもととなった寺院です。その所在地については諸説がありますが、現在のところ私は、曾我川（百済川）東方の広陵町百済から、子部神社の鎮座する橿原市飯高町および小槻町、ないし磯城郡田原本町佐味にかけての地域のどこかに求めるべきではないかと考えています。

これを要するに、広陵町百済近辺の地は、「忍坂王家」の第二のふる里ともいうべき地であり、敏達天皇からその子彦人大兄皇子を経て、さらに孫の舒明天皇へと伝領されていったことが考えられるのです。

なお、『延喜式』によると、彦人大兄皇子の奥津城は「成相墓」と称せられ、大和国広瀬郡に所在すると記されていますが、これも以上のような事情によるものと思われる。ちなみに、この成相墓は、広陵町大字三吉小字バクヤに所在する牧野古墳（円墳・径約六〇メートル）に比定する説が、現在の学界では半ば通説となっています。

このようにみえますと、天武天皇の子息の高市皇子の奥津城が広瀬郡の「三立岡」にあり、またその子息の長屋王が広瀬郡と深い関わりをもっていることも、無視できない

くなつてきます。

三立岡は広陵町大字三吉小字見立山付近に比定されており、敏達天皇や彦人大兄皇子、舒明天皇などの宮のあった百済の地と指呼の距離にあります。また、奈良そごう（百貨店）付近に所在した長屋王邸宅跡から出土した木簡に、「木上御馬司□」「木上司等十一月数進」などと書かれたものがあり、長屋王は、広瀬郡城戸郷（広陵町）ときわめて深い関係をもっていたことが知られます。したがって、「忍坂王家」が第二の拠点としていた広陵町近辺の所領は、舒明天皇崩御後も、その子の天武天皇を経て高市皇子へ、そしてさらに、その子の長屋王まで伝えられてい

たことが推測されるのです。

葛下郡と「忍坂王家」

葛下郡にあっても、広瀬郡と同様、「忍坂王家」との密接な関係を指摘することができます。特にこの場合、重要なのは、茅渟王との関わりです。

まず第一に、正安四（一三〇一）年、審盛によつて撰述された『放光寺古今縁起』によると、下郡に属する王寺町本町二丁目に建葛されていた片岡王寺（放光寺）は、茅渟王を祖と仰ぐ大原真人氏ゆかりの寺院であったといえます。してみると、出土瓦の年代からみて、この寺院の創建に茅渟王が深く関わっていたことは、ほぼ確実としなければならぬでしょう。



“忍坂王家” 関係地図



平野の巨石(“七つ石”の一つ)

第二に、『延喜式』によると、茅渟王の奥津城は葛下郡に営まれたとされるされています。すなわち、諸陵寮に「片岡葦田墓」

茅渟皇子。大和国葛下郡に在り。兆域東西五町。南北五町。守戸無し。」とあります。

以上の点から、七世紀代における葛下郡の北部地域には、茅渟王系一族の勢力の及んでいたことが知られるのです。

では、平野塚穴山古墳は、茅渟王系の人たちと関係のある古墳なのでしょうか。結論を先にいえば、私は、この平野塚穴山古墳こそ、茅渟王その人の奥津城ではないかと考えます。以下に、その論拠を示したいと思います。

片岡葦田墓

平野塚穴山古墳を茅渟王の奥津城と考える第一の根拠は、その所在地にあります。前述したように、『延喜式』によると、茅渟王の奥津城は、葛下郡にあり、「片岡葦田墓」と称されていたといえます。この片岡葦田墓とはいいたい、何に由来する名称なのでしょう。『延喜式』に記載されている他の陵墓名から類推すると、それは片岡の葦田という地名に由来しているとみるのが妥当です。では、片岡の葦田とは、どこなのでしょう。

まず、片岡の地名ですが、これは葛城北部の広域称で、現在の王寺町から河合町

西部・上牧町・香芝市・大和高田市にかけての地域の総称です。そうすると、葦田はこの地域のなかにある地名であると判断せざるをえません。そこで、片岡の地域から葦田あるいは葦田の付く地名を探してみると、次の二つがあります。

その一つは、『放光寺古今縁起』にみえる「葦田上池・葦田中池・葦田下池」の葦田であり、これは現在の王寺町本町四丁目に所在する芦田池・中池付近の地に比定することが可能です。他の一つは、上牧町にあり、今は上牧町文化館が建てられています。かつてこの地には葦田池があり、その付近一帯を葦田と呼んでいました。また、中筋出作方蔵の『村誌』によると、中筋出作の北に隣接する地域は葦田原と呼ばれていたといえます。このことから、上牧町の葦田は、現在の文化館や公営住宅が建てられている地域にこれを比定することができるでしょう。

そうだとすると、古代に葦田と称せられていた地域は、現在の王寺町四丁目から上牧町の西部(旧大字北上牧)に至る付近一帯であったと推定することができ。しかも、この地域は、東西を馬見丘陵(豆山)と片岡山に挟まれ、まさしく「葦田」と呼ばれるにふさわしい地理的条件を備えているのです。

葦田の範囲が以上のごとくであったとすると、ここには注目すべき古墳が存在しています。それは、いま問題としている平野塚穴山古墳です。信頼できる記録に

よるかぎり、七世紀代における天皇や皇族・貴族・高級官僚クラスの人物で、この地域に墓が営まれているのは、茅渟王ただ一人であり、しかも七世紀代において、この付近で最も政治的ないし社会的地位の高い人物の奥津城であったと考えられるのが、平野塚穴山古墳です(詳細は後述参照)。

したがって、片岡葦田墓とは平野塚穴山古墳のことを指している可能性が強い、とみるのが、現段階では最も確率の高い推定といえるのではないでしょうか。

平野塚穴山古墳の築造年代

第二の根拠は、その築造年代が七世紀後半と推定されている点です。茅渟王の生年および没年については記録がないのでよくわかりませんが、義母の糠手姫皇女の没年(天智三年「六六四年」)などから推測すると、七世紀後半のある時期まで生存していた蓋然性がきわめて高いと考えられます。とすると、この古墳の築造年代は、その被葬者を茅渟王とするにふさわしいといつてよいでしょう。

ただし、ひとくちに七世紀後半の築造といつても、中葉に近い後半(第Ⅲ四半期)と末葉(第Ⅳ四半期)とでは、年代的にかなりの隔たりがあります。年代を推定するのに必要な遺物がほとんど出土していないので、断言することはできませんが、羨道をもつこのタイプの石室構造の古墳を

七世紀末葉まで下げる考え方には疑問があります。私は現在のところ、七世紀半ばすぎの築造とみるべきではないかと考えています。ちなみに、唐尺が使用されている点より考えて、七世紀半ば以前の築造とみることは困難です。

牧野古墳と 平野塚穴山古墳

第三に、この古墳の南東約三キロメートルの地に、牧野古墳が営まれていることです。前述したように、牧野古墳は押坂彦

人大兄皇子の成相墓とみる説が有力ですが、そうだとすると、茅渟王は押坂彦人大兄皇子の子供ですから、子供の奥津城が父のそれと近接した地域に営まれることは、大いにありうるべきことだといわねばなりません。というより、しごく当然のこととして、これを了解しなければならぬでしょう。

陵山里古墳群と 平野塚穴山古墳

第四に、古墳の内部構造に百済の陵山

里古墳群（特に東下塚古墳）の影響がみとめられることです。茅渟王は広陵町百済や王寺町舟戸近辺の地を介して、百済王族の翹岐や百済王氏善光の一族と深いつながりを有していたと考えられますから、彼の墳墓にそうした影響がみとめられることは、当然のことといえます。私の立場からいえば、影響がみとめられないことのほうが、かえって不自然なくらいです。特にこの場合、影響を与えたといわれている陵山里古墳群が、百済王およびその一族にかかわる古墳群であると推定されていることが注目されるでしょう。（以下、次号）



平野塚穴山古墳の石槨内部

〔注〕

① 平野古墳群は以下の古墳より構成されているものと考えられます。①平野二号墳（平野塚古墳）、②平野一号墳③平野三号墳（消滅）④平野四号墳⑤平野五号墳（平野岩屋古墳・消滅・地元で「七ツ石」と称せられている巨石群のほとんどは、この古墳の横穴式石室を構成していた石であったと推測されます。）⑥平野塚穴山古墳。

② 奈良県立橿原考古学研究所編「竈田御坊山古墳 付平野塚穴山古墳」（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告三冊、一九七七年）。

③ ちなみに横穴式石槨とは、横穴式石室と同じように横に出入り口が付いているが、底石もしくは台石を敷いたのちに棺を納める施設を構築するという方法（底石先置法）を用い、しかもその棺を納置する施設が小さく楕円状、すなわち棺を入れる外箱状のようになっている構造の古墳を、このように称しています。

④ この須恵器は中村浩（なかもろひろし）編年Ⅱ型式第六段階に相当します。したがってこの古墳の築造年代の上限は、七世紀の第Ⅱ四半期（六二六～六五〇）ということになります。

⑤ 一瀬和夫「終末期古墳の墳丘」（『網干善教先生華甲記念 考古学論集』所収 一九八八年）。

⑥ 小泉俊夫「石器のふるさと 香芝」（一九八八年）。

⑦ 塚口義信「茅渟王伝考」（『堺女子短期大学紀要』第二十五号、一九九〇年）。

⑧ 最近の学界では、桜井市吉備に所在する吉備池廃寺を百済大寺に比定する説が脚光を浴びています。考古学的観点からすると、その可能性もありますが、現在のところ決め手となる文献史料がほとんどない状態ですので、もう手を上げてこの説に賛成するわけにはまいりません。したがってここでは、いましばらく発掘調査の進行状況を見守りたいと思います。なお、念のために申し添えますが、かりに吉備池廃寺が百済大寺であったとしても、「忍坂王家」が広瀬郡や葛下郡と密接な関わりをもっていたということについては、なんら変わりはありません。

⑨ 詳しくは、塚口義信「百済大井宮（敏達天皇）」（『ヤマト王権の謎をとく』所収、一九九三年）を参照。

⑩ 平林章仁「聖徳太子と敏達天皇後裔王族」（『日本書紀研究』第十六冊、所収、一九八七年）。

⑪ 東潮・田中俊明「韓国の古代遺跡」『百済伽耶篇』（一九八九年）。

（堺女子短期大学学長・文学博士）